

「誇り」

（紀の川市優秀賞受賞）

貴志川中学校 3年 碓 ひかり

始まりは小学校4年生からだった。その時から私の全てが変わり始めた。

私は、小学4年生からハンドボールを始めた。友達がやっていて、誘われたからだった。始めた頃はどんなスポーツかも分からず、球技が苦手な私は入って早々辞めたかった。投げ方も分からず、初めて出た試合はダメダメだった。しかし、家で練習するようになった私は気がついた頃にはハンドボールが楽しくてしかたがなかった。最下位ぐらいだった私のチームは小学校最後の大会ではついに優勝することができた。ハンドボールの楽しさを知った私は、中学生になってそのままハンドボール部に入った。入ってからすぐは確かに楽しかった。思い描いていた部活だった。早く部活に行きたいと強く思った。3年生が引退して、2年生が1人の私達のチームは、1年生の私達が主体となるチームだった。小学生からハンドボールをしていたこともあり、監督から強く言われることも増え始めた。だんだん自分自身も上手いかなくなってきて怒られてしまうことも増えた。そうすると部活に行くこと自体が怖くなってしまっていた。学校の授業の体育の先生でもあるので、正直学校に行くのも嫌になってしまっていた時期もあった。部活で怒られ、家に帰って泣いてしまうのは日々の当たり前になってしまっていた。「辞めたい」そう思う時も何回もあった。しかし、母は話をすべて聞いてくれ「あなたならできる」「まだできる」と励ましてくれた。私は、くじけそうになりながらも毎日部活に行った。初めての地方大会の新人戦では優勝。しかし、県大会では2位。負けてしまった。全国がかかった大会だった。得失点差で負けてはいないけど、結果上負けてしまった。とても悔しかった。そこから私達はコーチも増え、練習に励んだ。2年生になり、私達のチームは県大会を優勝して近畿大会に出場することができた。しかし、相手は3年生が主体なチームということもあり、3点差で負けてしまった。そこから私達は他県のチームとも練習をたくさんした。そして、全国大会に出ることができた。私達はもっと上を目指していた。1回戦はまさかの不戦勝となり、2回戦では4点差で負けてしまった。私達の目標であるところまではいけず悔しい結果になってしまった。焦りと緊張がでてしまっていた。今思い出してもはちきれそうなほど悔しい。私はもう3年生になった。次の県大会で優勝し、近畿大会で3位以内に入れば全国大会に出場できる。嫌だと思っていた部活も一つ一つが最後になってきている。私はこの3年間でとても成長したと思う。大きな声も出せず自分を出せなかった私も練習の声も大きくなり、性格も変わってきた。強くなれた。今、私をこん

な風に変えてくれた監督や両親そしてチームメイトにとっても感謝している。1人では絶対にここまでこれなかった。監督は自分の子供も小さいのに、私達のチームを優先し熱心に何事も教えてくれた。ハンドボールのことに限らず、礼儀や挨拶など私達が社会で生きていく力をつけてくれた。私は将来教師になることが夢なのだが、監督のように熱心にできないと思う。憧れであり、尊敬している1番の存在だ。コーチも遠い所から来て教えてくれている。親は心の柱だ。自分のことのように、考えてくれ辛い時もずっと支えてくれた。スポーツとは支えられてできている。1人ではできない。日頃の感謝の気持ちを、プレーという形で恩を返せるように一つ一つを大切に頑張りたい。そして卒業しても出会った人や起こった出来事、感謝の気持ちを忘れずにこれから人生を生きていきたい。私はこの経験を自信に変えて生きていこうと思う。最後まで自分に負けなかった自分を誇りに思っている。

